九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

スペイン語「過去未来」再考 : 過去の推量を表す用法をめぐって

山村, ひろみ
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/4773107

出版情報：言語文化論究. 48, pp.1-16, 2022-03-17. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

スペイン語「過去未来」再考
――過去の推量を表す用法をめぐって――*

山　村　ひろみ

0．はじめに

スペイン語の過去未来[1]の機能については諸説があり、その本質的機能についての統一的見解はまだない。そこで、本稿はスペイン語の過去未来を同形式と同じような働きをすると言われる他の言語の形式と比較対照しながらそれに特有の用法を確認し、その用法から同形式の機能を再検討した。この目的を遂行するにあたり、本稿は Agatha Christie の *The Thirteen Problems* の英語およびそのスペイン語、フランス語、イタリア語、ポルトガルポルトガル語、ブラジルポルトガル語、ルーマニア語訳からなるパラレルコーパスを用い、そこに出現したスペイン語の過去未来の振る舞いを、原本の英語に出現した would およびフランス語訳に出現した条件法現在のそれと対照しながら分析した[2]。その結果、この対比分析から明らかになった様々な問題のうち、本稿ではスペイン語の過去未来に特有の用法、すなわち、同形式は英語の would、フランス語の条件法現在とは異なり、過去の事態の推量に言及することができるという問題に焦点を当て議論していく。

本稿の構成は次のとおりである。第 1 節では英語の would、フランス語の条件法現在、スペイン語の過去未来の一般的解釈を見た上で、上述のパラレルコーパスで確認された英語の would、フランス語の条件法現在には見られないスペイン語の過去未来に特有の用法、すなわち、過去の事態に言及する用法の具体例を提示する。第 2 節では、そのスペイン語過去未来に特有な用法が RAE y ASALE（2009）の *Nueva gramática de la lengua española*（*NGLE*）でどのように記述されているかを見る。第 3 節では、スペイン語過去未来の過去の事態の推量用法に関する代表的研究である Rojo & Veiga（1999）を紹介すると同時にその問題点を指摘し、それに代わる解釈として山村（2020）を提示する。最後の第 4 節では、それまでの議論をまとめる。

1．パラレルコーパスで確認されたスペイン語過去未来に特有の用法

本節では、まず、英語 would（以下、would）、フランス語条件法現在（以下、条件法）、スペイン語過去未来（以下、過去未来）の標準的解釈を各言語の規範的文法書を参考にまとめた上で、本稿が用いたパラレルコーパスにおいて確認されたスペイン語過去未来に特有の用法、すなわち、過去の事態に言及する用法の具体例を提示する。

1.1．英語 would、フランス語条件法現在、スペイン語過去未来の標準的解釈

本項では、would、条件法、過去未来の標準的解釈を各言語の規範的文法書を基に見ていく。

まず、would の標準的解釈については Quirk et al.（1985）*A Comprehensive Grammar of the English Language* を参照した[3]。それによると、would は基本的に will が持つのと同じ機能を過去において示すものとされている。具体的には、過去における予言（prediction）、「～したものだった」と訳される過去の習慣における予言（habitual predictive meaning）、過去の意志（volition）を示す。また、would には条件文の帰結節に典型的な仮想的意味標識（marker of hypothetical meaning）の働きもある。さらに、この仮想的意味と密接に関係するものとして、非断定（tentativeness）あるいは丁寧さ（politeness）を表す用法もあげられているが、これらは will には見られないものである。

次に、条件法の標準的解釈については、Grevisse et Goose の *Le bon usage* にある条件法現在形の項を参照した[4]。それによると、条件法は、まず、ある過去の時点から見た未来の事態を表す。また、同形式は、発話時から見た未来あるいは現在における推測上、想像上の事態も示す。この二番目の点については、提示された例文からいわゆる現在の反実仮想文の帰結節に出現する条件法も同形式の「推量的（conjectural）」用法として認識されていることが分かる。なお、このような条件法の「推量」用法が見られるのは非過去、すなわち、未来あるいは現在の事態に対してである。

一方、過去未来の標準的解釈については、RAE y ASALE（2009）の *Nueva gramática de la lengua española*（以下、*NGLE*）にある condicional simple の項を参照した[5]。それによれば、過去未来は、発話時あるいは他の基準時に関連づけられた事態を表すのみならず、仮定的状況に従属した非事実の内容も表し、その典型としては反実仮想文の帰結節に出現する過去未来があげられる。また、過去未来は未来と同じく不定詞を基にして形成されたものであり、一方、過去未来と線過去（pretérito imperfecto）はともに相対時制かつ過去あるいは非現実な状況との関係において解釈される点において類似する。そして、線過去が「過去の現在」と見なされ Bello の用語で copretérito（共時過去）と呼ばれるのに対し、過去未来は pospretérito（後時過去）と呼ばれ「過去の未来」とされるが、これは過去未来と線過去を同じ概念体系で特徴づけたものである。（p.1778, 23.15b）さらに、過去未来には *“probablemente*+imperfecto”、*“podía*（法動詞 poder の imperfecto）+infinitivo’ に転換可能な「推量（conjetura）」用法があり、これは未来の推量用法に類似したものであるが、未来の推量が現在に言及するのに対し過去未来は過去に言及する。この推量用法には、condicional de rumor「噂の過去未来」、condicional de atenuación「緩和の過去未来」と呼ばれるものがある。他方、condicional de modestia o de cortesía「謙遜あるいは丁寧の過去未来」と呼ばれる用法は仮定的状況を想定しながら現在の事態に言及したものである。（p.1780, 23.15j）

以上、would、条件法、過去未来の標準的解釈を各言語の規範的文法書における記述を基に見た。その結果、これら 3 形式は、①過去から見た未来の事態を示す、②当該事態に対する「推量」を示す、という点で共通することが分かる[6]。しかし、②の「推量」については、どの時間領域の事態の「推量」を示すかに関しては違いが見られ、would、条件法は非過去の事態に対する推量を表すのに対し、過去未来は非過去の事態のみならず過去の事態に対する推量をも表すことができる。

1.2. パラレルコーパスの観察結果

本節では、パラレルコーパスに出現した would、条件法、過去未来の観察結果について述べる。

1.2.1. would、条件法、過去未来の出現頻度と３形式に共通の用法

まず、パラレルコーパス中の would、条件法、過去未来それぞれの出現頻度については、原本である would（should も含む）は239例、条件法は211例、過去未来は211例であった。この結果は、

would には条件法と過去未来には対応しない用法があることを示唆する。このように出現頻度には違いがあるものの、「過去の未来」用法、反実仮想文の帰結節に出現する用法、また、語気緩和用法のように 3 形式に共通に見られる用法は少なくなかった[7]。しかし、各形式に特有の用法も見られた。以下では、そのうち過去未来にのみ確認された過去の事態に言及する用法を見る。

1.2.2. スペイン語過去未来に特有の用法：過去の事態に言及する過去未来

まず、過去未来に対応した英語の形式、フランス語の形式を示した次の表を見られたい。

表１：スペイン語過去未来に対応する英語の形式

対応形式	用例数	
would	120	
simple past	43	
	could	16
	might	7
	その他	**20**
なし	16	
present	15	
would have+pp	2	
ought to	2	
現在分詞	2	
had better	1	
合計	211	

表２：スペイン語過去未来に対応するフランス語の形式

対応形式	用例数
conditionnel	101
cond. composé	6
imparfait	33
passé simple	**2**
passé composé	**13**
plus-que-parfait	**4**
présent	18
future	3
présent de subjonctif	2
infinitif	6
現在分詞	2
なし	21
合計	211

上の表で注目したいのは網掛け部分、すなわち、過去未来が対応した英語の法助動詞以外の単純過去（simple past）、フランス語の単純過去（passé simple）、複合過去（passé composé）、大過去（plus-que-parfait）である。これらの対応形式には would、条件法、過去未来に共通の「過去から見た未来」、また、当該事態の「推量」を表すといった働きは認められないからである[8]。以下、過去未来がこれらの形式に対応した具体例を示す。なお、当該の過去未来は下線、それに対応する英語、フランス語の形式は太字イタリックで、また、当該形式が出現したパラレルコーパスの行は丸括弧で示す。

(1) 西：El mensaje que decía: “Mata”. -¡Qué horror! -dijo Jane con un estremecimiento-Pero ¿cómo <u>llegaría</u> el mensaje? Ese es el punto que traté de aclarar como única esperanza de resolver el misterio.

英：(...) - the message that said, “Kill. “‘How nasty!’ said Jane Helier, and shuddered. But how ***did*** the message ***come***? That was the point I tried to elucidate - the one hope of solving my problem. [simple past]

仏：(...), le message disant: « Tuez. » - Quelle horreur !s’exclama Jane en frissonnant. - Mais par quel moyen lui ***était parvenu*** ce message? Ce fut le point que je tentai d’élucider, le seul espoir de résoudre l’énigme. [plus-que-parfait] (2849)

(2) 西：Pero las cosas no acabaron ahí. -Supongo que empezarían las habladurías, como suele ocurrir – manifestó la señorita Marple.
英：But things did not rest at that. Miss Marple nodded her head. 'There ***was*** talk, I suppose,' she said, 'there usually is.' [simple past]
仏：Toutefois, les choses n'en restèrent pas là. Miss Marple hocha la tête. - On ***a commencé*** à jaser, je suppose. C'est ce qui se passe d'habitude. [passé compose] (91)

(3) 西：Ignoro lo que le diría, ella era tan crédula, pero consiguió que abandonara la partida y regresara antes para encontrarse con él a las siete, junto a la escalera de incendios del balneario.
英：I don't know what he ***said*** to her - she was a credulous girl, as I said just now. [simple past]
仏：J'ignore ce qu'il lui ***dit***. Comme vous le savez, elle était très crédu1e. [passé simple] (3540)

(1)の過去未来 llegaría は英語の単純過去 did come、フランス語の大過去 était parvenu、(2)の過去未来 empezarían は英語の there 構文の単純過去 there was、フランス語の複合過去 a commencé、(3)の過去未来 diría は英語の単純過去 said、フランス語の単純過去 dit に対応している。つまり、これらの過去未来はいずれも英語、フランス語において過去時に定位された事態を表す時制に対応している。しかし一方で、当該事態は発話時以前の過去に定位されてはいるものの、質問文や否定文、また、「推測する」「知らない」を意味する主動詞 に導かれた従属文中に出現したものなので、その生起の真偽は確定されたものとは言えない。

2．過去の事態に言及する過去未来に関する *NGLE* の記述

さて、スペイン語の過去未来が過去の事態に言及するということは先行研究でも指摘されてきた。例えば、1. 1. でも見たように、*NGLE* はスペイン語の過去未来が過去の事態の「推量」を表すと指摘している。しかし、従来過去の事態の推量を表すとされた過去未来は《*probablemente*+imperfecto》、《*podía*+不定詞》のように線過去に置き換え可能なものを例にすることが多く、(1)から(3)の過去未来のように点過去（pretérito perfecto simple）に置き換え可能なものが取り上げられることは少なかった。とはいえ、*NGLE* の23.15k には次の記述がある。

(4) 23.15k Existe una variante del condicional de conjetura que acepta la paráfrasis con el verbo *poder* en su interpretación epistémica o impersonal (§28.6w). La alternancia CANTARÍA～*pudo* CANTAR se comprueba en oraciones como *No recuerdo cuánto me* {*costaría*～*pudo costar*} *esta cámara*, donde *costaría* añade al significado de *costó* el del modal *poder*, (...) (RAE y ASELE 2009: 1781)
（認識的あるいは非人称的解釈の動詞 poder とのパラフレーズを認める推量の過去未来の変種が存在する。CANTARÍA と *pudo* CANTAR の交替は *No recuerdo cuánto me* {*costaría*～*pudo costar*} *esta cámara*（私はこのカメラが {いくらしただろうか～いくらしたかもしれないか} を覚えていない）のような文において確認されるが、*costaría* は *costó*（費用がかかった）の意味にモーダルな *poder* の意味を加えている。）

上の引用は、過去未来の用法の中には "*poder* の点過去+不定詞" にパラフレーズされ、当該動詞

の点過去による表出に *poder* のモーダルな意味が追加された意味になるものがあることを示している。*NGLE* はそのような過去未来について、次のように述べている。

(5) Este uso de CANTARÍA está próximo al futuro compuesto de conjetura (§23.16r), así como al condicional compuesto. La alternancia entre estos tiempos se obtiene con mayor facilidad en contextos retóricos: *¡Quién me* {*mandaría~habrá mandado~habría mandado~pudo mandar*} *salir de casa!*, con leve diferencia de significado, (...). (Ibid.)
(この CANTARÍA の用法は、推量の未来完了、過去未来完了に近い。これらの時制の交替は、わずかな意味の違いはあるものの、比喩的文脈においてより容易に見られる：*¡Quién me* {*mandaría~habrá mandado~habría mandado~pudo mandar*} *salir de casa* (誰が私に家から出るように命令しただろうか)*!*, (中略))

この引用文によると、過去の事態の推量を表す過去未来は同じく推量を表す未来完了、過去未来完了に交替可能である。しかし、注意すべきは「わずかな意味の違いはある (con leve diferencia de significado)」という部分である。これは、過去の推量を表す過去未来と未来完了、過去未来完了との間に差異があることを示すものだからである。ここから過去の事態の推量を表す過去未来とそれと置換可能とされる未来完了、過去未来完了との異同を明らかにすることが重要になってくるが、*NGLE* は次のように述べている。

(6) El tiempo prospectivo (futuro o condicional) marca la conjetura en las series mencionadas, mientras que el exponente de la anterioridad es el tiempo compuesto o bien –si no está presente- la terminación de imperfecto contenida en el propio condicional. *Cantaría* no es, ciertamente, un "futuro del pasado" en secuencias como la citada *No recuerdo cuánto me costaría*, sino un pasado subordinado a un entorno modal. (下線は筆者) (Ibid.)
(前述の例文の前望的時制(未来あるいは過去未来)は推量を表示するが、一方、前時性を表示するのは複合時制 (tiempo compuesto) あるいは —— 複合時制がない場合には —— 過去未来自体に含まれた線過去の語尾 (terminación) である。確かに、引用された *No recuerdo cuánto me costaría* のような連続における *cantaría* は「過去の未来」ではなく、モーダルな環境に従属した過去である。)

この引用文に従うならば、前望的時制 (tiempo prospectivo) のひとつである過去未来は推量を示すが、*cantaría* という過去未来の形式には *–ía* という線過去の語尾が含まれているので同形式は前時性も示す。その結果、*cantaría* は「過去の未来」ではなく「モーダルな過去」を示すことにもなるのだが、本稿が問いたいのは、同じ過去未来という形式が示す「過去の未来」と「モーダルな過去」という 2 つの異なる解釈がそれぞれどのようなメカニズムを経て得られるのかということである。

ところで、*NGLE* は、次のように、推量の意味を含むことなく点過去に置き換え可能な過去未来についても触れている。

(7) 23.15r El uso de CANTARÍA por CANTÉ en contextos retrospectivos es similar al de CANTABA por CANTÉ en esos mismos entornos (...): Este uso del condicional, (...), se ha llamado FACTUAL, pero podría

denominarse también NARRATIVO, para equipararlo al imperfecto del mismo nombre. En esas oraciones no se introducen situaciones hipotéticas, sino hechos acaecidos.（...）（RAE y ASELE 2009: 1784、下線は筆者）
（回顧的な文脈においてCANTARÍAをCANTÉの代わりに用いる用法は、同じ環境でCANTABAをCANTÉの代わりに用いる用法と類似する（中略）：この用法は事実的（FACTUAL）用法と呼ばれているが、語りの用法の線過去と同じものとして、語りの（NARRATIVO）過去未来と名付けることもできるだろう。同文において導入されているのは仮定的な状況ではなく実際に起こった事実である。）

NGLE が「事実的（語りの）用法」と呼ぶ過去未来は、次のように、本稿のデータでも確認された。

（8） 西：Ya sabes que la gente cambia las ruedas, a menudo lo he visto hacer y, claro, ***pudieron coger*** la rueda de la camioneta de Kelvin, sacarla por la puerta pequeña del garaje y salir con ella al callejón. Allí la colocarían en la camioneta del señor Newman y bajarían hasta la playa, cargarían el oro y volverían a entrar por el otro acceso al pueblo.
英：People change a wheel, you know -I have often seen them doing it- and, of course, they ***could*** take a wheel off Kelvin's lorry and take it out through the small door into the alley and ***put it*** on to Mr Newman's lorry and ***take*** the lorry out of one gate down to the beach, ***fill it up*** with the gold and ***bring it up*** through the other gate,（...）.
仏：On peut changer les roues, vous savez - j'ai souvent vu des gens faire ça- et bien sûr ils ***pouvaient*** enlever une roue du camion de Kelvin, la sortir par la petite porte dans l'allée, ***la mettre*** sur le camion de Newman, ***amener*** le camion jusqu'à la plage par la porte principale, ***le charger*** d'or et ***remonter*** par l'autre porte.（929）

（8）は、犯人が金塊を運んだ手順が説明されている場面である。原本の英語では "*could*+不定詞"、フランス語訳でも英語の "*could*+不定詞 " に相当する "*pouvoir* 半過去+不定詞 " が連続して使用されているが、スペイン語訳では英語の "*could*+不定詞 " に相当する "*poder* 点過去+不定詞 " のほかに過去未来によって表された部分もある。本稿はこの過去未来で表された部分を *NGLE* のいう過去未来の「事実的（語りの）用法」と見なす。確かに、この「事実的（語りの）用法」の過去未来は点過去に置き換え可能であるが、それはどのようなメカニズムによるものなのか。この点について、本稿は次のように考える。

まず、語りの内容がどのように展開しどのような結末を迎えるかは、語り手（話し手）にとってはすでに確定された事実である。それゆえ、通常、語りの内容、つまり、過去の出来事は過去に生起した事実を表す時制、スペイン語では点過去によって表される。しかし、そのような過去の出来事が過去未来によって表されると、語り手はその視点を発話時からその出来事が生起した過去の時点にシフトさせることになる。語り手がそのような視点のシフトを行うのは、読者を当該事件の場に置き、その展開により注目させるためであろう。というのも、過去未来は事態をある過去時より後に定位するだけでその生起の有無は表さないため、その実際の生起を確認するにはそれに続く事の次第に目を向けざるをえなくなるからである。このように考えるならば、点過去に置き換え可能であっても、「事実的（語りの）用法」の過去未来は点過去と同じ機能を持つものとは言えない。

ところで、先に見た(1)から(3)の過去未来はこの「事実的（語りの）用法」なのだろうか。本稿はそうではないと考える。第一に、それらは会話文中に出現したもので、「語り」に出現したものではないからであり、第二に、それらは、先にも述べたように、当該事態の生起の真偽が確定されない環境に出現したもので、語り手にとって確定された事実を表す「事実的（語りの）用法」の過去未来の出現環境とは異なるものだからである。

３．過去の事態に言及する過去未来の解釈

本節では、一般に「過去の未来」に言及するとされる過去未来がどのようなメカニズムを通して過去の事態の推量を表すことになるのか、その解釈を見ていきたい。

3.1. Rojo & Veiga（1999）の解釈

「過去の未来」を表すとされる過去未来が点過去や線過去に置換可能な過去の事態の推量を表すことができるという事実は周知されているが、そのメカニズムについて言及している研究は少ない[9]。本稿ではそのうち Rojo & Veiga（1999）（以下、R & V）を取り上げる。R & V は、過去の事態の推量を表す過去未来を、以下の ‘dislocación temporal（時の転位）’ によるものとしている。

(9) La ‘dislocación temporal’ de las formas verbales es el mecanismo mediante el cual, por ejemplo, las formas que, empleadas conforme a sus valores temporales rectos, expresan alguna relación básica que incluye un vector de posterioridad adquieren, cuando son empleadas para expresar simultaneidad, un valor adicional de incertidumbre que no poseían inicialmente, como muestran los ejemplos (36) y (37).
(動詞形式の「時の転位」とは、例えば、その本来的時制価値にしたがって用いられる際、「後時的ベクトル」を含む基本的関係を表す形式が「同時性」を表すために用いられると、最初にはなかった「不確定」という付加的価値を獲得することになるメカニズムであり、(36), (37) の例によって示される。)

(36) a. En este momento *son* las diez. 今は10時だ。
b. Dentro de un rato *serán* las diez. もうじき10時だ。
c. *Serán* las diez (en este momento). （今は）10時だろう。

(37) a. En aquel momento *tenía* treinta años. あのとき彼は30歳だった。
b. Me dijo que *cumpliría* treinta años al día siguiente. 彼は翌日30歳になると私に言った。
c. En aquel momento *tendría* treinta años. あのとき彼は30歳だったろう。

（Rojo & Veiga 1999: 2894）

R & V によれば、(36a)の *son* は発話時に、(37a)の *tenía* はある過去時に対して同時性を示し、(36b)の *serán* は発話時に、(37b)の *cumpliría* はある過去時に対して後時性を示す。一方、(36c)の *serán* は(36a)の *son* と同じく発話時に対する同時性を示すが(36b)の動詞形式を用い、(37c)の *tendría* は(37a)の *tenía* と同じくある過去時に対する同時性を示すが(37b)の動詞形式を用いている。そして、R & V は、(36c)、(37c)のように、それが表す時間関係と当該形式の表す本来的価値が合致しないとき、結果として(36ab)、(37ab)のいずれにも存在しなかった「不確定（incertidumbre)、以

下、推量」というモーダルな付加的価値が付加されるというのである。この未来、過去未来に見られる「時の転位」について、R & V は次のようにも述べている。

(10) En efecto, sustituyendo en las realizaciones básicas mencionadas el vector de posterioridad por uno de simultaneidad o, en algunos casos, suprimiéndolo, obtenemos las siguientes correspondencias:
(実際、言及された基本的実現において後時的ベクトルを同時的ベクトルに交替したり、後時的ベクトルを削除すると、次の対応を得る。)
O+V → OoV　　futuro (未来) → presente (現在)
(O−V) +V → O−V　　pos-pretérito (後時過去) → pretérito (過去=点過去)
(O−V) +V → (O−V) oV　　pos-preterito (後時過去) → co-pretérito (共時過去=線過去)
(Rojo & Veiga 1999: 2913)

R & V の時制論では、O は origen と呼ばれ発話時に相当する。また、+V は後時ベクトル、−V は前時ベクトル、oV は同時ベクトルを指す。これらに基づき上の記号を解釈すると、未来の後時ベクトルが同時ベクトルに交替されると現在、過去未来の後時ベクトルが削除されると点過去、同じく過去未来の後時ベクトルが同時ベクトルに交替されると線過去に対応することになる。R & V はこの点についてさらに次のように説明している。

(11) (73) a. En estos momentos *serán l*as cuatro.　　今は 4 時だろう。
b. *Moriría* el año pasado.　　彼は去年死んだだろう。
c. Dijo que en aquellos momentos *serían* las cuatro.　彼はそのとき 4 時だっただろうと言った。
Los tres ejemplos de (73) ofrecen formas verbales en un uso que permite su fácil sustitución por *probablemente son*, *probablemente murió* y *probablemente eran*, lo que no deja lugar a dudas acerca de que las relaciones temporales expresadas son efectivamente 'presente', 'pretérito' y 'co-pretérito'. Dichas relaciones permiten establecer una oposición modal que podemos llamar de *incertidumbre/ no incertidumbre*, (...)　(Rojo & Veiga 1999: 2913-2914)
((73) の 3 つの例は、*probablemente son* (たぶん 4 時だ), *probablemente murió* (彼はたぶん死んだ)、*probablemente eran* (たぶん 4 時だった) と容易に交替可能な用法の動詞形式を提示しており、このことから表示された時間関係が実際「現在」「点過去」「線過去」であることには疑問の余地がない。これらの関係は不確定 / 非−不確定と呼ぶことのできるモーダルな対立を設定することを可能にする。)

ここでは、過去未来と点過去との交替についての R & V の解釈が先に見た *NGLE* のそれとは異なっている点に注目したい。(4)で見た *NGLE* の解釈では、当該過去未来の交替は "*poder* の点過去+不定詞"、未来完了、過去未来完了との間に想定されていたが、R & V があげる (11b) (=73b) の過去未来 (moriría) に想定された交替形式は "murió" であり、"*poder* の点過去+不定詞の *pudo* morir"、未来完了の "habrá muerto"、過去未来完了の "habría muerto" ではないからである。

以上の R & V の解釈をまとめるならば、過去未来が表す過去の事態に対する推量は、その本来的価値の後時ベクトルの削除あるいは同時的ベクトルへの交替という「時の転位」に因るものということになる。この解釈は、過去未来が示す「過去の未来」と「モーダルな過去」の間に何らかの機

能的関連性を見出そうとしている点で評価できるが、問題がないわけではない。それは、過去未来が点過去に対応する事態の推量を表す際のメカニズムと線過去に対応する事態の推量を表す際のメカニズムの違い、つまり、前者は過去未来の後時的ベクトルが「削除される」のに対し、後者はそれが「同時的ベクトルに交替される」という点である。特に、点過去に対応する過去未来に見られる後時ベクトルの「削除」は、先に見たR＆Vの提唱する「時の転位」では何ら言及されなかったもので、疑問が残る。本稿は、過去未来への交替により点過去、線過去に同じ「不確定」というモーダルな価値が付加されるのであれば、そのためのメカニズムも当該二形式に対して同じものであるべきだと考える。

3.2. 山村（2020）の解釈

R＆Vの解釈に代わるものとして、本稿は山村（2020）を提示したい。まず、山村（2020）の未来と過去未来の機能に対する解釈を見ておこう。それは、以下のようなものである。

（12）未来の機能

機能①　O（~Prop. & Prop.）^{pos}：当該事態の発話時以後の生起の表示
O（rigen）=発話時，~Prop. & Prop.=〈当該事態の未成立（~Prop.）から成立（Prop.）への変化=当該事態の生起〉，pos（terioridad）=以後

例　Mañana Juan irá a Barcelona. 明日フアンはバルセローナに行く。
O（~Prop. & Prop.）^{pos} = O（~［Juan ir a Barcelona（フアンがバルセローナに行くこと）］&［Juan ir a Barcelona］）^{pos} +mañana（明日）

機能②　FoV：当該事態の既定の未来時に対する同時性の表示
F（uturo）= 既定の未来時, oV =〈同時性 = 当該事態の現在形による表出〉

例　Cuando llegues a casa, ya será de noche. 君が家に着くころは、もう夜だろう。
FoV = F（=cuando llegues a casa（君が家に着くとき））oV（=〈ya es de noche（もう夜だ）〉）

（13）過去未来の機能

機能①　P（~Prop. & Prop.）^{pos}：当該事態の既定の過去時以後の生起の表示
P（asado）= 既定の過去時

例　María dijo que Juan iría a Barcelona. マリアは、フアンはバルセローナに行くと言った。
P（~Prop. & Prop.）^{pos}= P（= “María dijo” の成立時）
（~［Juan ir a Barcelona］&［Juan ir a Barcelona］）^{pos}

機能②　PFoV：当該事態の既定の過去時から見た未来時に対する同時性の表示
P（asado）F（uturo）= 既定の過去時から見た未来時

例　María dijo que cuando llegara a casa, ya sería de noche.
マリアは私が家に着くときには、もう夜だろうと言った。
PFoV = P（= “María dijo” の成立時）F（= “cuando llegara a casa”の成立時）oV（=〈ya es de noche〉）

山村（2020）は、スペイン語の未来、過去未来のそれぞれに2つの機能を付与している。すなわ

ち、未来には O（~Prop. & Prop.）^{pos} が示す「当該事態の発話時以後の成立」の表示と FoV が示す「当該事態の既定の未来時に対する同時性」の表示という機能、過去未来には PF（~Prop. & Prop.）^{pos} が示す「当該事態の既定の過去時以後の成立」の表示と PFoV が示す「当該事態の既定の過去時から見た未来時に対する同時性」の表示という機能である。この解釈は、未来には O+V、過去未来には（O−V）+V のように、各形式に 1 つの機能しか設けない R & V の解釈とは異なっている。一方、山村（2020）は、未来および過去未来の「推量」用法についても、以下の解釈を提示している。

（14）未来の推量用法の解釈

操作　OoV → FoV［推量（可能性）］：発話時に対する同時性から未来時に対する同時性への転位、そこから生まれる推量（可能性）

OoV = 当該事態の発話時に対する同時性，FoV = 当該事態の未来時（=可能世界）に対する同時性

例　Juan tendrá ya 30 años. フアンはもう30歳だろう。

OoV → FoV［推量（可能性）］

= O［Juan tiene ya 30 años］→ F［Juan tiene ya 30 años］［推量（可能性）］= Juan tendrá ya 30 años

（15）過去未来の推量用法の解釈

操作①　PoV → PFoV［推量（可能性）］：既定の過去時に対する同時性（PoV）から既定の過去時から見た未来時に対する同時性（PFoV）への転位、そこから生まれる推量（可能性）

PoV = 既定の過去時に対する同時性，PFoV = 既定の過去時から見た未来時（= 可能世界）に対する同時性

例　En aquel entonces Juan tendría ya 30 años. あの当時フアンは30歳だったろう。

P oV → PFoV［推量（可能性）］

= P（en aquel entonces）［Juan tiene ya 30 años］

→ PF（en aquel entonces）［Juan tiene ya 30 años］［推量（可能性）］= En aquel entonces Juan tendría ya 30 años.

操作②　O（~Prop. & Prop.）$^{ant.}$ → PF（~Prop. & Prop.）［推量（可能性）］：当該事態の発話時以前における生起から既定の過去時から見た未来時における生起への転位、そこから生まれる推量（可能性）

O（~Prop. & Prop.）$^{ant.}$= 当該事態の発話時以前における生起，PF（~Prop. & Prop.）= 過去時から見た未来時（可能世界）における当該事態の生起

例　Ese día Juan llegaría tarde.　その日フアンは遅く着いただろう。

O（~Prop. & Prop.）$^{ant.}$ → PF（~Prop. & Prop.）［推量（可能性）］

= O（~［Juan llegar tarde］ & ［Juan llegar tarde］）^{ant}+ese día（その日）

→ PF（=ese día）（~［Juan llegar tarde］&［Juan llegar tarde］）［推量（可能性）］=Ese día Juan llegaría tarde.

山村（2020）も未来および過去未来の推量用法の解釈のためにR＆Vが提唱する「時の転位」を利用しているが、その適用の仕方はR＆Vのそれとは異なる。(10)で見たように、R＆Vでは、未来の後時ベクトルが同時ベクトルに、また、過去未来では後時ベクトルが削除あるいは同時ベクトルに交替されることにより、現在、点過去あるいは線過去によって表される事態に「推量」というモーダルな価値が付加されていたが、山村（2020）では、交替しているのはベクトルではなく、そのベクトルが示す時間関係の基準時だからである。つまり、現在の推量を表す未来では、現在の基準時である発話時（O）が発話時以後の未来時（F）に、過去の推量を表す過去未来の場合、線過去で表される事態の推量では、既定の過去時（P）が既定の過去時から見た未来時（PF）に、また、点過去で表される事態の推量では、発話時（O）が既定の過去時から見た未来時（PF）に交替されるのである。このように各形式が示す時制関係の基準時を交替させるという考えには次のようなメリットがある。

まず、R＆Vが未来、過去未来のモーダル用法の説明のために提案した「時の転位」のメカニズムは、両形式に付与された後時ベクトルが同時ベクトルに交替されることもあれば、その後時ベクトル自体が削除されるといったように、「不確定、推量」という付加価値を生むための操作に一貫性がなかった。しかし、山村（2020）の解釈ではいずれも、基準時が（O）、（P）のように（F）を含まないものから（F）、（PF）のように（F）を含むものに交替するといった一貫性のあるものになる。また、この基準時が（F）を含まないものから（F）を含むものに交替するということ自体にも意味がある。発話時以後の未来時（F）、ある過去時以後の未来時（PF）というのはいわゆる「可能世界（mundo posible）」であり、当該事態をそのような非現実の可能世界に定位させることとその事態を「不確定」と見なすことの間には関連性があると言えるからである[10]。

しかしながら、点過去に対応する事態の推量を表す過去未来の解釈、すなわち、(15)の操作②（=16）にはより詳しい説明が必要である。そこでは、発話時（O）から既定の過去時から見た未来時（PF）へという基準時の転位だけでなく、（~Prop. & Prop.）が示す当該事態の「未成立から成立への変化」が起こる時点の変化も含まれているからである。

(16) O（~Prop. & Prop.）$^{ant.}$ → PF（~Prop. & Prop.）［推量（可能性）］

(16)は、点過去の示す「当該事態の発話時以前での生起（= O（~Prop. & Prop.）$^{ant.}$）」が過去未来の示す「当該事態の過去から見た未来時（=PF）での生起（=~Prop. & Prop.）に変更されることを示しているが、過去未来の基準時のPFは当該事態の生起時でもある点に注意されたい。ここで問題になるのは、(17a)(17b)が示すように、（~Prop. & Prop.）を共有する「過去から見た未来」を示す過去未来と点過去に対応する推量用法の過去未来がどのように区別されるかである。

(17) a. 過去未来の「過去から見た未来」の用法：P（~Prop. & Prop.）^{pos}
b. 過去未来の点過去に対応する「推量」用法：
O（~Prop. & Prop.）$^{ant.}$ → PF（~Prop. & Prop.）［推量（可能性）］

本稿は、両者の違いは各用法が出現する環境によって区別されると考える。(17a)が示すように、「過去から見た未来」に解釈される過去未来はその基準時となるPを必要とするが、それは通常、(18)のように、過去の主動詞（=dije）、あるいは、(19)のように、それが出現する過去形主体の自

由間接話法という文脈によって示される。

(18) 西：Le dije que tomaríamos toda clase de precauciones, pero no me dejó insistir.
英：I told him we would take all precautions, but he waved my words aside.
仏：Je l'assurai que nous prendrions les précautions nécessaires, mais d'un geste il me fit taire. (2796)

(19) 西：La de Mary estaba dos puertas más allá, y los de la funeraria no irían a recoger el cadáver hasta después de que anocheciera. Él contaba con ello. Nadie lo notaría.
英：Mary's room was two doors off. The undertakers wouldn't come till after dark - he counted on that. No one would notice.
仏：Celle de Mary était deux portes plus loin. Sanders comptait sur le fait que les entrepreneurs de pompes funèbres ne viendraient pas chercher le corps avant la nuit. Personne ne le remarquerait. (3536)

一方、過去の事態の推量用法は、(20)(21)のように、現在形主体の会話文中に出現することから、「過去の未来」を示す過去未来のようにその基準時となるべき P は存在しない。しかし、当該事態の生起の有無あるいは当該事態の生起のあり方が話題になっているのは文脈から明らかである。そのようなときにこそ、話し手は過去から見た未来、すなわち、過去の可能世界を表示する *-ría* という形態素を持つ過去未来を用いて、当該事態の過去における推量を表すのではなかろうか。

(20) (=2) 西：-**Supongo que** empezarían las habladurías, como suele ocurrir –manifestó la señorita Marple.
英：'There ***was*** talk, I suppose,' she said, 'there usually is.'
仏：-On ***a commencé*** à jaser, je suppose. C'est ce qui se passe d'habitude. (91)

(21) (=1) 西：-Pero ¿cómo llegaría el mensaje? Ese es el punto que traté de aclarar como única esperanza de resolver el misterio.
英：But how ***did*** the message ***come***? That was the point I tried to elucidate - the one hope of solving my problem.
仏：-Mais par quel moyen lui ***était parvenu*** ce message? Ce fut le point que je tentai d'élucider, le seul espoir de résoudre l'énigme. (2849)

最後に、点過去に対応する事態の推量を示す過去未来と線過去に対応する事態の推量を示す過去未来の違いについて述べる。そのためには、まず、本稿が過去未来に付与した 2 つの機能について説明しておきたい。

本稿は、(13)において、過去未来の機能として、P (~Prop. & Prop.)^{pos} という記号で表される「当該事態の既定の過去時以後の生起の表示」と PFoV という記号で表される「当該事態の既定の過去時から見た未来時に対する同時性の表示」を提示したが、このうち後者については、Yamamura (2021) が指摘した未来の「当該事態の既定の未来時に対する同時性」の場合と同じく、語彙アスペクトに

よる制約がある点を強調しておかねばならない[11]。すなわち、過去未来の「当該事態の既定の過去時から見た未来時に対する同時性の表示」、また、未来の「当該事態の既定の未来時に対する同時性の表示」はいわゆる Vendler（1967）の state 事態にしか適用されないのである。一方、過去未来の「当該事態の既定の過去時以後の生起の表示」、未来の「当該事態の発話時以後の生起の表示」という機能はすべての事態に適用される。このような観点からすると、過去未来の「当該事態の既定の過去時から見た未来時に対する同時性の表示」、未来の「当該事態の既定の未来時に対する同時性の表示」という働きは適用される事態の意味構造と深く関わるものであり、過去未来、未来という時制形式だけによって遂行されるものとは言えないと思われる。

以上のことを踏まえ、点過去に対応する事態の推量を示す過去未来と線過去に対応する事態の推量を示す過去未来の違いを再考するならば、次のようになる。すなわち、「既定の過去時に対する同時性」を表示する線過去の推量を表す過去未来は、(15)の操作①が示すように、線過去の基準時（P）が既定の過去時から見た未来時（PF）に転位されその PF に対して同時性を示すものに限られるが、それが可能なのは「既定の過去時から見た未来時に対する同時性」を表示する過去未来、すなわち、Vendler の state 事態に適用された過去未来だけということになる。一方、点過去に対応する事態の推量を示す過去未来にそのような制約はない。

４．まとめ

本稿は、スペイン語過去未来の機能を再検討するために、パラレルコーパスに出現した英語の would、フランス語の条件法現在と同形式の振る舞いを対照し、過去未来には過去の事態の推量を表すという would、条件法には見られない特有の用法があることを明らかにした。次に、この過去未来に特有の用法が同形式の他の用法、特に、「過去から見た未来」を表す用法とどのような関係があり、それぞれの用法がどのようなメカニズムを通して区別されることになるのかを *NGLE* の記述、Rojo & Veiga（1999）、山村（2020）を参照しながら考察した。その結果は以下のようにまとめられる。

- *NGLE* は過去の事態の推量を表す過去未来について言及してはいるが、同用法と過去未来の基本的用法である「過去から見た未来」の用法との関係についてはほとんど触れていない。
- Rojo & Veiga（1999）は過去未来に対し（O−V）+ V という唯一の機能を付与し、その過去の事態の推量を表す用法は「時の転位（dislocación temporal）」というメカニズムに因るものとしている。しかし、その解釈は、線過去に対応する過去の事態の推量は過去未来の本来的価値にある後時ベクトル（+V）が同時ベクトル（oV）に交替されたもの、点過去に対応する過去の事態の推量は同形式の後時ベクトルが削除されたもの、といったように一貫性を欠いたものである。
- 山村（2020）は、過去未来に「当該事態の既定の過去時以後の生起の表示（=P（~Pop. & Prop）^{pos}）」と「当該事態の既定の過去時から見た未来時に対する同時性の表示（=PFoV）」という２つの異なる機能を付与する。そして、過去未来の推量用法は、その本来的価値の基準時に（F）を含まない形式がその基準時を（F）を含むものに転位することによって引き起こされると解釈する。つまり、線過去に対応する過去の事態の推量を表す過去未来は、本来的価値が「当該事態の既定の過去時に対する同時性の表示（PoV）」である線過去の基準時（P）が「ある過去時から見た未来時（PF）」に転位したもの、点過去に対応する過去の事態の推量を表す過去未来は、本来的価値が「当該事態の発話時以前の生起の表示（O（~Prop. & Prop.）^{ant}」である点過去の基準時（O）

が「ある過去時から見た未来時（PF）」に転位し、その時点（PF）での当該事態の生起（~Prop. & Prop.）を表示することになったものということになる。この解釈は線過去に対応する過去の事態の推量と点過去に対応する過去の事態の推量を同じ基準時の転位という操作で説明できるという点で Rojo & Veiga（1999）の解釈よりは一貫性がある。

注

＊ 本稿は2021年、8月22日オンラインで開催された SELE2021（日本スペイン語学セミナー2021）で発表した「スペイン語「過去未来」再考：パラレルコーパスから見たスペイン語「過去未来」の特徴」の内容の一部を修正・加筆したものである。なお、本稿は JSPS 科研費 JP18H00667の助成を受けている。

1 本稿の言うスペイン語の「過去未来」とは RAE y ASALE（2009）において condicional simple de indicativo（直説法単純条件）と名付けられた動詞形式を指す。

2 同コーパスは各言語約70000語からなる。

3 would は、同書の主に pp.218-221, 228-234で説明されている。

4 条件法現在は、同書の pp.1148-1150（§889）に記載されている。

5 過去未来は、同書の pp. 1778-1786で説明されている。

6 Quirk et al.（1985）の英語 would の解釈には「推量」という語は出現していないが、will の現在の「予言」の説明では That'*ll* be the postman という例文があげられている。この例文はロマンス諸語の未来の「推量」用法を議論する際に決まって参照されるものである。したがって、本稿では英語の「予言」には「推量」も含まれるとする。

7 確かに、「過去から見た未来」の用法は 3 言語に共通に見られたものの、その比重はスペイン語過去未来において高かった点は記しておきたい。

8 表 2 の対応形式 imparfait に網掛けがないのは、imparfait には、条件法と同じ「過去の未来」を表す用法があるからである。

9 Rojo & Veiga（1999）のほかにも Rivero & Arregui（2018）がある。

10 以上の説明を明確に示すには、(14) の操作は OoV → FoV = OoV［推量（可能性）］、(15) の操作はそれぞれ PoV → PFoV = PoV［推量（可能性）］、O（~Prop. & Prop.）$^{ant.}$ → PF（~Prop. & Prop.）= O（~Prop. & Prop.）$^{ant.}$［推量（可能性）］とすべきであるが、本稿は山村（2020）の解釈を引用しているため、そこで用いられた記号をそのまま使用した。

11 「当該事態の既定の未来時に対する同時性」を表す未来の制約については Yamamura（2021）、「当該事態の既定の過去時から見た未来時に対する同時性」を表す過去未来の制約については山村（2020）を参照されたい。

参 考 文 献

Grevisse, M. et Goose, A.（2011）: *Le bon usage*, 15ème édition, Louvain: Duculot.

Quirk, R., Greenbaum, S, Leech, G & J. Svartvik（1985^{2nd}）: *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Pearson Japan.

Real Academia Española-Asociación de Academias de la Lengua Española（2009）: *Nueva gramática de la*

lengua española, Madrid: Espasa.

Rivero, M. L. & A. Arregui (2018): "Unconditional readings and the simple conditional tense in Spanish: inferentials, future-oriented intentionals, future-in-the-past", *Probus* 30, Issue 2, pp. 305-337.

Rojo, G. & Veiga, A. (1999): "El tiempo verbal. Los tiempos simples.", Bosque, I. & Demonte, V. (dir.) *Gramática descriptiva de la lengua española*, Vol. 2: Las construcciones sintácticas fundamentales. Relaciones temporales, aspectuales y modales, pp.2867-2934, Madrid: Espasa Calpe.

山村ひろみ（2020):「スペイン語の「未来」と「過去未来」：その機能的類似点と相違点について」『言語文化論究』No.44, pp.11-26.

Yamamura, H. (2021): "Los usos del futuro en español y sus funciones",『言語文化論究』No.46, pp. 17-31.

Vendler, Z. (1967［1957]): "Verbs and times", *Linguistics in Philosophy*, pp. 97-121, Ithaca: Cornell University Press.

資　料　体

山村ひろみ（編）（2018）科研費（基盤研究（C）課題番号 JP15K02482）「現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究」研究成果報告 CD 第 1 部 Agatha Christie, *The Thirteen Problems* のパラレルコーパス

Christie, Agatha (2002): *The Thirteen Problem*s, Harper Collins Publishers.

Christie, Agatha (2003): *Miss Marple y trece problemas*, C. Poraire de Molino (trad.), Delbolsillo.

Christie, Agatha (2013): *Miss Marple au Club de mardi*, Durastanti, Sylvie (trad.), Éditions de Masque.

Reconsideración sobre la función del condicional simple en español

—en torno al uso de conjetura del pasado—

Hiromi YAMAMURA

El presente artículo trata sobre el uso de conjetura del pasado del condicional simple en el español (en adelante, condicional), que se ejemplifica en "En aquel momento tendría treinta años" (Rojo & Veiga 1999: 2894) y "Moriría el año pasado" (Rojo & Veiga 1999: 2913)". Primero, hemos comparado el comportamiento del condicional con los de la forma *would* en inglés y la forma *conditionnel présent* en francés basándonos en los datos recogidos en el corpus paralelo y hemos comprobado que este uso es propio del condicional. Después, hemos examinado este uso con especial atención a su relación con el otro uso del condicional, el de "futuro del pasado", consultando las interpretaciones de *NGLE*, Rojo & Veiga (1999) y Yamamura (2020). El resultado se resume como sigue:

- *NGLE* describe detalladamente el uso de la conjetura del pasado, pero no se refiere a la relación que tiene este uso con el uso de "futuro del pasado" del condicional.
- Rojo & Veiga (1999), que asigna al condicional la única función representada por el signo (O-V)+V, argumenta que el uso en cuestión es debido al mecanismo llamado "dislocación temporal". Sin embargo, esta interpretación no parece tener coherencia explicativa porque, según ella, en el condicional que denota la conjetura de la situación expresada por el pretérito imperfecto se sustituye el vector de posterioridad (+V) por el de simultaneidad (oV), mientras que en el condicional que denota la conjetura de la situación expresada por el pretérito perfecto simple se omite simplemente ese mismo vector de posterioridad.
- Yamamura (2020) asigna al condicional dos funciones distintas, una de las cuales se representa por el signo P(~Prop. & Prop.)^{pos}, que denota que el cambio de no-surgimiento al sí surgimiento de la proposición (=~Prop. & Prop.) ocurre posteriormente (=pos) a algún tiempo en el pasado (=P) que es anterior al momento del habla y la otra se representa por el signo PFoV, que denota que una situación es simultánea (=oV) con algún tiempo posterior al tiempo pasado (=PF). Según Yamamura (2020), en el condicional que denota la conjetura de la situación expresada por el pretérito imperfecto se sustituye el tiempo de referencia P del pretérito imperfecto, con el que la proposición tiene la relación simultánea, por el tiempo PF, mientras que en el condicional que denota la conjetura de la situación expresada por el pretérito perfecto simple, cuyo valor recto se representa por el signo O(~Prop. & Prop.)^{ant}, que denota el surgimiento de la proposición en cuestión en algún tiempo anterior (=ant) al momento del habla (=O), se sustituye el tiempo de referencia O por el tiempo PF, en el cual tiene lugar la situación representada por dicha proposición. Así, con esta interpretación se puede explicar tanto el condicional correspondiente al pretérito imperfecto como el condicional correspondiente al pretérito perfecto simple por el mismo mecanismo que consiste en la sustitución del tiempo de referencia (P) u (O) por el tiempo (PF).